

居酒屋での友人の話です。

「ある国の議員審議会館の出口に秤があつてね。」

「ほう、何のために？体重を測るの？」と私

「それは優れものの AI 秤で、その国の憲法を始め、今まで審議された記録や、議員さんの日頃の言動が一切入力されているんだ。そして、その秤に議員さんが乗ると、体重を測るのではなくて、その日の議会で議員さんがどれだけほんとうのことを言ったか、嘘を言ったかを、今までの記録と照らし合わせて、忽ち測ることが出来るものでね。ほんとうのことを言った場合は青切符、嘘が多ければ赤切符が出るんだ。そして、その切符を出口のドアに通さなければ出られないのよ。」

「面白いな！」

「ある時、総理大臣が秤に乗ったら、動かないんだ。慌てて、原因を調べるために検事長を呼んでね。彼は慌てたよ。なにせ、彼は賭博好きで、その秤から出るその日の赤切符の数を仲間と賭けて遊んでいたのね。」

「へえ」

「とにかく、検事長さんが飛んできて、いろいろ調べたところ、AI 秤は付度中とことで、切符が出なかったそうだよ。アハッハ。」

「AI 秤まで付度するの？」

「取り払われたら困るからな。どこかのアカデミー会員のよう。」

彼はこの馬鹿馬鹿しい話を、ロシアの小説家コロレンコ（1853-1921）の「マカールの夢」（1885）からヒントを得たとのことでしたので、私も読んでみました。

当時のロシアには農奴制度があり、仕事はきつく、暮らしは貧しく、飢えや寒さに遭いどおしの百姓マカールは大変でした。彼が死んで、主の前の秤に乗せられて、生前嘘をいった数を調べられることになりました。彼が秤に乗ると、嘘の罪業の皿が大きく傾きます。主は、「この怠け者を去勢馬として賄方に廻してやれ、そして乗りつぶすまでこれに署長を乗せて運ぶようにせよ。」と宣告します。当時の農奴は家畜のように見なされていたようです。

ところが、生前、満身に喋ったことなどなかったマカールが急に喋り出すの

です。

「自分は生涯、追い使われたのだ！領地管理人やら、親方やら、議員やら、署長やらに追い使われて、年貢をとられた。坊さん達からは扶持を取られて追い使われ、貧乏、飢え、寒さ、暑さ、雨、日照りにも追い使われ、凍てついた地面や、意地の悪い密林にもこき使われた。—— また兵隊にとられた自分の兄息子が、なんのために、どこへ連れられて行かれたのか、そしてどこで死に、今どこにその惨ましい骨がころがっているか。」——憤怒に満ちた言々句々が続きます。そして、最後に主の目に涙が光ります。ほのぼのとしたものを感じさせる結末です。

当時のロシアは貴族社会で、農奴の生活は大変惨めでした。トルストイを始め多くの知識人たちは、農奴制度について悩んでいましたが、そのような状況の中で書かれた「マカールの夢」は、佳品だと感じました。